

= 今年度上演曲のご案内 =

カンタータ第1番 (あしたに輝く たえなる星よ) BWV1

大村 恵美子

この曲は、東京バッハ合唱団が創立第1回の“公演”(1962年)にとりあげ、その後も1968年と1991年の2度にわたり定期演奏会で上演してきた、いわば愛唱のカンタータである。

バッハの死後100年を期して、1851年刊行が開始された、いわゆる「旧バッハ全集」で作品目録(BWV)の第1番として選ばれたのが、このカンタータである。この順序は、作品年代順でもなく、多分に便宜的なものだったが、これ以後はこのBWVの数え方が固定し、1950年に始まったいわゆる「新バッハ全集」にも、そのまま踏襲されている。

研究が進むにつれて、一部分が偽作として省かれ、また新発見による追加も行われた。教会カンタータで偽作とされて、新全集に入らなかったものは、BWV15, 53, 141, 142, 160, 189の6曲である。

しかし、バッハの教会カンタータの分野に分け入ろうとする者が、まずどうしても知りたくなるのが、やはり作品番号No.1とされたこの《あしたに輝く たえなる星よ》であるのは、自然なことであろう。事実として、この作品は、カンタータ全体を代表するにふさわしい、どこから見ても第一に挙げて納得できると思えるほどの資質を備えている。

バッハがライプツィヒ就任後2年目に、集中的に取り組んだ「コラール・カンタータ」形式の作品群の最後にあたり、マリヤの受胎告知の祝日(ルター派が残した聖母マリヤ関連の祝日は3つあるが、そのうちの1つ。3月25日)のために書かれたものだが、内容的にも、マリヤというよりも、神の子イエス(暁の星に喩えられる)に対する普遍的な讃美、ひいては、ひとりごを地に遣わした神の、愛に満たされた天国への、憧れと感謝が、<暁の星>という美しいイメージに象徴されて、甘美に万人の心をひたすのである。

考えようによっては、待降、降誕、新年、さらには天国-死-葬送、すなわち人生におけるあらゆる機会に歌って、いずれも慰めと喜びを得ることができる、すばらしい音楽といえるのではないか。

フィリップ・ニコライ あしたに輝く たえなる星よ (Philipp Nikolai, "Wie schön leuchtet der

Morgenstern", 1599)を基調コラールとした、典型的なコラール・カンタータ。冒頭合唱にその第1節を、最終コラールに第7節を用い、また途中の第2曲レチタティーヴォから第5曲アリアには、その第2-6節がパラフレーズされている。このコラールは、数あるドイツ・コラールの中でもとりわけ美しい<コラールの女王>として、早くから人々に愛されてきた。『讃美歌21』にも、No.276として収録されている。

独奏ヴァイオリン2を協奏曲風に活躍させ(第1,5曲)、冒頭合唱と最終コラールでホルン2、オーボエ・ダ・カッチャ2も加わって雄大な宇宙のひろがり、パストラール風なびやかさを印象づける。

1. 合唱

8分の12拍子の器楽リトルネロに導かれて、ソプラノでコラール第1節を提示し、下3声が創意に富んだ変奏を行う。行ごとの間奏と、前奏と同じに長い後奏で枠づけする。

コラールの旋律自体から引き出されたように、合唱も、器楽も、上行的な旋律動機が、何重にも積み重ねられて、暁に輝く星の高さへと向かってゆく。最終行いと高き君よは、1オクターヴ下向の音階進行のみの旋律だが、それを受ける下3声と通奏低音は、下からその旋律に反行して上へ上へとかけ昇る。曲全体を支える伴奏声部(弦)でくり返される、8分音符の同音反復は、噴きあがる上昇動機群の支えのようで、全体の気分をわくわくさせる。

2. レチタティーヴォ(テノール)

ベツレヘムの地名が出てくるが、イエスの誕生そのものを指すのではなく、そこで大天使ガブリエルがマリヤに受胎告知をした、そのよき訪れのことばを、天のみ糧よ(糧=パン)と言っているのである。このカンタータの各曲を、甘美さが支配しているが、短いこのセッコ・レチタティーヴォでもいかにうるわしと、天使のことばを表現する。

3. アリア(ソプラノ)

オーボエ・ダ・カッチャとソプラノの織りなす愉悦の讃美。愛の燃えさかる炎という強い形容にもかか

ならず、歌はさわやかで、激情的ではなく、むしろ端正で明かるい。

4. レチタティーヴォ (バス)

構造的には、冒頭合唱と最終コラールの枠の間にある4曲は、

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 2. レチタティーヴォ (T) | 4. レチタティーヴォ (B) |
| 3. アリア (S) | 5. アリア (T) |

と、2つの対をなしている。

第2曲と同様、ここでもセッコ・レチタティーヴォで、神の子の受難によるわれらの救いと祝福に、感謝をささげようと促す。

5. アリア (テノール)

それに導かれて、コンチェルトのヴァイオリン2と弦合奏の活発な8分の3拍子の舞曲となって、テノールが、跳躍する音程をちりばめた、歓喜の歌をうたう。強弱のエコー効果もまじえ、目まぐるしいほどの、激しい動きである。

6. コラール

簡素な4声体コラールで第7節が歌われ、それ自体美しいコラール旋律に正面から向き合うような、大きく深い満足を味わう。<永遠>という想念に貫かれたカンタータである。

新年度 初練習の日



レストラン「オ・ランデブー」にて 2003年1月11日

年が明け、いよいよ「バッハ・カンタータ50曲選」による系統的な演奏スケジュールの第1年が始まりました。本年5月10日の第93回定期演奏会は、カンタータ4曲にモテット1曲という、盛りだくさんのプログラムで、これについては、多すぎるのではないかと

いう心配もあり、今後、そのつど原案を検討してゆくためにも、今回はテストケースで、このまま断行してみようという決意のもと、始められたのでした。

この数年の恒例となっている、新年初練習（今年は1月11日、土曜日）の前の事務局（大村宅）訪問と、近くのレストランでの会食には、10名の参加がありました。「50曲選」の楽譜の山で倉庫と化しそうな事務局では、1時間足らずの短い間に、昨年の写真アルバムを見たり、「一茶俳句かるた」（野尻湖合宿の帰途、一茶記念館で買った）に興じたり、今年のカンタータの2曲のコラール（BWV30より 荒野に呼ばれる 主の声きこゆ、BWV1より げに幸なるかな 永遠（とこしなえ）の主に）を歌い初めしたりして、年の門出を祝いました。

レストランで会食後、バスと徒歩とで、うららかな新春の世田谷の午後にゆったりと満喫。桜新町の練習には、いちだんと成長した室田家の兄妹も交えて、意気込みにあふれる団員が各パートにそろい、一気に全曲目の譜読みを、という構え。とにかく5曲の楽譜を全部開いて、今後の糸口にとりついた、気迫の初練習でした。



戦争を全身で止めよう

大村 恵美子

アメリカのイラク攻撃は、もう止められないと考えるときに、すでに平和は破られるのです。

今月1月末の情勢でも、まだまだ流動的で、1月29日号の「ニューズウィーク」誌では、こんな記事が報じられています。

<フセイン降ろしへ動くアラブ>

近日中に、トルコで周辺諸国首脳会議が開かれるが、サウジ外相筋の話では、「軍事面の主導権をにぎるアメリカと、政治的解決策を主導する私たちは、相手がきちんと役割を果たしているかどうかを互いに監視しあっている。」

これはいわば、国際的なタカ派とハト派の役割分担だ。戦争を避けられるうえにフセインも排除できるというのは、たしかに話がうますぎる気もする。だが昨年夏、ブッシュ政権がイラク政権交代を望む

と公言していた時期に、ヨーロッパとアラブ諸国は大量破壊兵器の放棄だけを問題にすべきだと主張していた。

ところが今は、アメリカ政府が大量破壊兵器に焦点を絞りこむ一方で、サウジアラビアやトルコはフセインに退陣を迫ろうとしている。驚くべき変化だ。それを考えれば、何が起きてもおかしきではない。ことによると、この戦争回避策も勝利への道なのかもしれない。

また、アメリカの軍事行動についても、次のような指摘がされています（同誌）。

新聞報道とは裏腹に、米軍の配備は急ピッチで行われているわけではない。陸軍が派遣する最低3旅団のうち、現地に向かっているのは1旅団だけ。海兵隊員の派遣はまだ半数にも達しておらず、空軍の展開もおくれている。

これは何を意味するのか。ひとことで言えば「戦術」だ。イラクのサダム・フセイン大統領相手の心理戦である。

アメリカをゆさぶろう

昨2002年2月に発行された本に、蓮見博昭『宗教に揺れるアメリカ』（日本評論社）というのがあって、アメリカ人のマインドの内面を少しのぞくような思いがしましたが、アメリカの行動を理解しながら、戦争回避へと導くために、この本なども役に立つような気がしました。

この本の内容の部分を紹介しつつ、私たち自身の問題をつきとめてゆきたいと思います。

まず、アメリカの歴史上における政治と宗教の関係（この著者の用語では「政教関係」）の変遷を大まかに、4つに分けています。

1. 1776年までの植民地時代...政教一致の時代
2. 独立革命以後、南北戦争（1861-65）まで...WASP（アングロサクソン系白人プロテスタント）支配体制（政教分離の徹底過程）の時代
3. 南北戦争以後、1960年代まで...「市民宗教」の時代
4. 1970年代以後現在まで...宗教関係利益団体の活動が活発化

ひとつとびに、蓮見氏の結論をまとめてみますと

アメリカでは、良いにつけ悪いにつけ、民主政治の背後に宗教があり、大きな影響を及ぼし続けてきた。この国はそれをめぐって、しばしば大きく揺れ動いてきた。政治の領域では、最高の権威ともいう

べき連邦最高裁の判断なども動揺することがまれでない。

宗教を政治に利用しつづけてきた

「ゆれうごく」アメリカというのは、私の考えでは、それだけ柔軟性のある、若い国家、ある意味では向上心につきあげられる証拠、ともしりうるので、他者からの提言に照らして方向転換をする余地をいつも持っているのではないかと希望的な観測もしてみるので

す。現在のイラク問題についての私自身の考えでは、冒頭のニューズウィークの記事でも紹介したように、同じ文化圏にあるアラブ諸国が、真剣に知恵を出しあって、イラクの姿勢を変えてゆくことがいちばん好ましいと思っているのですが。

ここで、蓮見氏の著書からの要約に入ります。

・同時多発テロ事件から9日後（2001年9月20日）ブッシュの議会演説から「彼らはテロリストたちにキリスト教徒とユダヤ教徒を殺せと命令している。彼らは、アジア・アフリカの広大な地域からキリスト教徒やユダヤ教徒を追い出すよう望んでいる。」「自由と恐怖、正義と残虐はつねに戦ってきたが、われわれは、神がそれらの間で中立的でないことを承知している。神はわれわれに英知を与え、アメリカ合衆国を見守って下さるように。」

・ブッシュはここで、単純な善悪二元論といったキリスト教原理主義の影響もつよく受けている。

・そのため、この同時多発テロとそれへの報復戦争は、レトリックを含めて、イスラム原理主義とキリスト教原理主義を中心とする宗教戦争ないし文明戦争という側面をもっているといえよう。

・ブッシュ自身は原理主義者ではないと考えられるが、アメリカでは、キリスト教原理主義を含む保守的プロテスタント（いわゆる「福音派」Evangelicals）の信仰をもつ者は、国民の3分の1を占めるという世論調査が、何度も発表されている。

・2000年の大統領選挙では、ブッシュの全得票のうち32%が「献身的福音派」のもので、彼の最大の支持母体だった。

・政権閣僚としては、法律の番人ともいべきジョン・アッシュクロフト司法長官がこれに属している。

・宗教心については、「自分は宗教的な人間だ」というのが、イタリア人84%、アメリカ人83%（2位）、ドイツ人57%、フランス人51%、日本人26%（1990-1993年調査）

・現在でもキリスト教徒全体はまだ全人口の 80%を維持しており、アメリカがなお実質的なキリスト教国であることがわかる。[プロテスタント 55%、カトリック 28%、ユダヤ教 2% (1999 年現在)]

・もともと、先住民にとって代わったアメリカ建国の正当化には、旧約聖書の歴史が重ね合わせて考えられた。神との「契約の民」とされる古代イスラエル民族は、紀元前 13 世紀頃、「約束の地」カナン（現在のパレスティナ）に到着、先住のカナン人を武力で「全滅」させて同地を占領、定住するにいたったといわれている。

・当時のピューリタン指導者のひとり、ジョン・メーソンなどは、「こうして神は、われわれの敵を滅ぼして彼らの土地を遺産としてわれわれに与えることを喜ばれた」と述べ、先住民たちから土地をとりあげて移動させるための宗教的正当化のパターンをつくったとされている。宗教的な差別がほぼ完全になくなるのは、1978 年の「アメリカ・インディアン宗教的自由法」制定まで待たねばならなかった。

好戦的な聖書解釈

・初期ピューリタニズムに強かった黙示文学的思想は、千年王国論（この世の終末に先立つ千年間、キリストが再来して、教徒たちとともに悪魔を抑えこみ、「至福」の時代をすごすとする説）、アメリカ選民思想、善悪二元論などの形で、後々の政治や外交政策にまで色濃く影響した。

・また、人間性悪説の影響としては、現在にも残るように、共和制（大統領制）とともに、政治権力の制限・乱用防止、いわゆる「抑制と均衡の原則」が、アメリカ政治の大きな特色となっている。

・公民権運動に続くベトナム反戦運動の成功に自信を得た主流諸教派指導者は、その後政治的提言活動などを活発化させていくが、急進化にともなう一般信徒からの遊離も次第に目立ってきた。

・1991 年の湾岸戦争では、福音派はアメリカ政府を支持していたし、主流派の一般信徒も大部分は、宗教的な「正戦論」を採用した当時のブッシュ大統領を支持した。

もはや「正戦論」は成り立たない

・1970 年代末頃からは、宗教保守派が世俗的（非宗教的）なニューライトとの関係を緊密化させる一方で、過激化の傾向を示すようになる。中絶反対運動でも、「暴力行為は大部分、プロテスタント原理主義者たち

によるもので、プロテスタントが反対運動に参加するようになってから、暴力行為は増大した。」

・1979 年の「モラル・マジョリティー」の結成は、画期的なことで、急速に会員をふやし、1985 年には 650 万人に達したといわれた。

・1980 年代の大統領選挙では、カーターを見限ってレーガン支持に切りかえた。共和党が原理主義者たちによって「ハイジャック」されつつあるとの心配もなされている。

・レーガンは、「ハルマゲドン」を世界最終核戦争に結びつけ、その必然性を信じるキリスト教原理主義的解釈を、少なくとも 1986 年までは受け入れていたようである。

・レーガン、ブッシュ（父）と 2 代にわたる共和党出身大統領が、道徳再興・宗教重視の方針を強くうち出し、献身度が高いほど対抗文化に反対する度合いが強くなる、という危険な道を辿った。

- ・かれらが依拠する旧約聖書でさえも、戦争規定は、
 1. 敵に対する総攻撃の前にまず降伏勧告をする
 2. 敵側であっても、女子供は殺してはならない
 3. 将来食用になる果樹などを含む焦土作戦は禁じられる
 など、これらに違反するのは不正だとしている。

・アメリカの指導者たちが正しい戦争だと称していたものも、不正そのものであることが多い。現代の戦争では、非戦闘員（民間人）の犠牲者が大幅に増加する傾向にあるので、この点だけから見ても、「正しい戦争」など、もはやありえなくなってきている。（民間人と軍人の死者数の反比例ぶりを見るがよい！：大村）

	軍人 (%)	民間人 (%)
第 1 次大戦	95	5
第 2 次大戦	52	48
朝鮮戦争	15	85
ベトナム戦争	5	95
	*	*

アメリカの外交政策に、しばしば影をおとす単独行動主義（ユニラテラリズム）も、「選民思想」の現われにほかならなく、こんな国主導の戦争に、人類の運命をゆだねるわけにはゆきません。周囲から大いに揺さぶりをかけ、本来の宗教がめざす〈あわれみ〉の真意を、一から出直して探求しなおしてほしいものと思います。

ここで、戦争の破壊を止められなかったとなれば、私たち自身も、同時代人としての責任を、今後ずっと負いつづけることになるでしょう。

了